若疑シク覚候ハバ
我等ノ所業終候処ヲ
爾等眼ヲ開テ看ヨ

7月5日
毎月5日20日発行
第12号
購読料 1部 30円
半年分 600円
1年分 1,200円（〒共）

叛旗
共産主義者同盟

発行人 川崎文人
編集人 仲代貴雄
発行所 東京都新宿区百人町2—197
東京バレエ劇場ビル2F
大久保プロ気付
共産主義者同盟
「叛旗」編集委員会
TEL 03—363—5809
振替 東京 182656

第五次砂川闘争勝利
7・10総決起集会
日時・7月10日午後6時
場所・立川商工会議所2F
反戦堅塁闘争委員会

12号論文

戦略・運動・組織の現段階と

八派 全共闘・反戦再編への具体的諸課題

「民族・国家」「擬制的世界」を撃つ戦略と政治路線

（1）沖縄闘争と革命の主体の危機
（2）八派—全共闘の現実的な解体局面
（3）八派—全共闘・反戦の再編・止揚の展望
（イ）沖縄闘争と戦略及び政治路線

6・17沖縄返還協定調印粉砕を当面する焦点とした沖縄闘争は私達にいくつかの事態をあきらかにした。

6・17返還協定調印粉砕へ到る私達たたかいの経過、内容は前号で報告したのでここではくわしくふれない。がそのたたかいの過程を通して鮮明になったもの、とりわけ革命的主体の危機について、その根拠と止揚への立場と主張を明らかにしたい。もとより私達は67年を起点とする60年代の階級闘争の高揚局面が、69年秋70年代への端緒で敗北してきた、後退局面への転回の要因を革命的主体の脆弱性として押えてきた。そしてこの脆弱性は革命的左翼の10年の歴史と内容を問うものであり、「綱領・戦略」、「党—大衆」運動—組織の根源からしか越えられないことを主張してきた。その主張と実践を共産同の分派—党派闘争から闘、反戦へ押し上げる過程を対権力、支配階級への闘いに媒介させることで展開してきた。

この事態は6・17への過程でもより鮮明となった。以下はそれへのメス入れと私達の主張であるが顕然とは、これまでの理論諸、全国紙の内容と併読されんことを。

（1）沖縄闘争と革命的主体の危機

6・17沖縄返還協定調印粉砕闘争の全過程の中で私達が突きつけたこの革命的主体の危機であった。この事態は次の三つの内容としてあらわれている。そのひとつは戦後二十五年、否、明治百年に渡る計算人民の集中されてきた矛盾・対立へのたたかいが戦後世界構造・秩序の中でもろに問題として問われている。そして現在的には返還・復帰・解放等々であらわれているのであるが、その根源的問題の背後へ到るから、政治的、思想的内容の問題である。問題のように、これらは革命的主体の内部で「戦略・路線」の

第五次砂川闘争の勝利に向け

七・一〇集会を圧倒的に克ち取れ

三多摩地区反帝戦線

6・13砂川現地闘争を闘う反帝戦線

自衛隊・米軍基地撤去闘争は、戦中過程に於ける革命一連闘争の戦闘の序章は開始された。

現第二三条廃の今日、日本帝国主義軍隊の保持する反革命軍隊は、社会構成の因数の日本国家機構の保護・社会構成の因数の日本国家機構の保護・社会構成の因数の日本国家機構の保護・